

不登校児童への望ましい対応のあり方

—構成的グループエンカウンターと校内サポートチーム作りを通して—

宜野湾市立大山小学校教諭 西俣 尚志

目 次

I	テーマ設定の理由	21
II	研究目標	25
III	研究仮説	25
IV	研究の全体構想図	26
V	研究内容	27
1	真の児童理解とは	27
2	児童の意識（実態）調査	28
3	魅力ある学級とは	30
4	構成的グループエンカウンター（以下 SGE）	31
5	楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U（以下）	31
VI	構成的グループエンカウンターによる検証授業（指導案）	31
VII	校内サポートチーム（校内支援体制）作りについて	40
VIII	研究の成果と今後の課題	45

不登校児童への望ましい対応のあり方

—構成的グループエンカウンターと校内サポートチーム作りを通して—

宜野湾市立大山小学校教諭 西俣 尚志

I テーマ設定の理由

1. 社会情勢から

文部科学省の諮問機関である「学校不適応対策調査研究協力者会議」の報告（平成15年4月30日）によると、「我が国の小・中学校の不登校児童生徒数は、平成13年度には約13万人9千人に上っており、過去最多を更新し続けている。」とのことである。そしてその内訳を見てみると、小学生が2万6,511人、中学生が11万2,211人となっている。

一方、沖縄県教育委員会が実施した平成13年度学校基本調査によると、本県の不登校児童生徒の数は、小学校で408人、中学生が1,722人、計2130人となっており、調査を始めてから最高を記録した前年度より多少減少したものの、児童生徒数の人口比率にすると全国を依然上回っているとのことである。

さらに私たちの宜野湾市に目を向け、過去5年間の宜野湾市教育委員会に報告された不登校児童生徒数の推移は、下記の表のようになっている。

年 度	平成 9年	平成 10年	平成 11年	平成 12年	平成 13年	平成 14年
中学校	94人	64人	88人	75人	102人	85人
小学校	12人	28人	33人	20人	29人	15人
合 計	106人	92人	121人	95人	131人	100人

表1 宜野湾市内小中学校の不登校者数推移（宜野湾市教育委員会）（平成15年）

本市の不登校児童生徒数は、過去5年間100人を越えたり、満たなかつたりしており、100人を基準に横ばい状態と言えるであろう。

しかし、全国・県・市が「不登校児童生徒数」と押さえた数字は、あくまで『不登校児童生徒』を何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的理由による者を除いたもの』と定義して、調査したものであり、この定義に当てはまらない（年間30日以上欠席に満たない不登校気味にある子・保健室登校の子・学級に潜む不登校予備軍（不登校の傾向にある）と呼ばれる子は含まれていない。これらの児童生徒を仮に含めると、おそらく膨大な数字になると考えられる。そういう意味では、まさに氷山の一角であるといえるであろう。

このように、全国的に増加し続けている不登校児童生徒の実態を受けて、先の述べた「協力者会議」は、「不登校に関する取組の改善を図ることは、我が国にとって喫緊の課題であって、早急に具体的な対応策を講じ、実行する必要がある。」と問題の深刻さを強く述べている。

しかし、「協力者会議」が述べる「不登校に関する取組の改善を図る」のは、「早急に具体的な対応策を講じる」のは、他でもない学校現場で日々子どもたちと過ごす私たち教師集団であり、学級を預かる私自身なのである。ここに私の本研究のテーマ（不登校児童への望ましい対応のあり方）を設定した大きな理由がある。

次にサブテーマについて述べてみたい。

「協力者会議」の報告によると、「不登校となった直接のきっかけについては、『学校生活に起因するもの』が36.2%、『家庭生活に起因するもの』が19.1%、『本人の問題に起因するもの』が35.0%となっている。それぞれに含まれる事項毎に見ると、『(特に直接のきっかけとなるような事柄がみあたらない)本人に関わる問題』(28.6%)、『友人関係をめぐる問題』(19.7%)、『親子関係をめぐる問題』(9.7%)等が多い。またこれらの推移を見ると、『友人関係をめぐる問題』の比率が伸びている」と指摘している。

さらに興味深いのは、『不登校経験者の実態調査』においては、『友人関係をめぐる問題』が最も多く、44.5%を占めており、続いて『学業不振』が27.6%、『教師との関係をめぐる問題』が20.8%であるなど学校生活に関わるものが顕著となっている。」と述べている点である。

この報告からすると、不登校を経験した児童生徒の実に半数近くの子が「友人関係をめぐる問題」をきっかけにして不登校になっていったことが分かるのである。

まとめると、「不登校となった直接のきっかけ」の36.2%が「学校生活に起因する」ものであり、不登校経験者の半数近く(44.5%)が「友人関係をめぐる問題」で悩み、苦しみ、不登校となっていったのである。

このことを素直に受けとめるならば、我々現場の教師が為さねばならないことは、おのずと決まってくるように思う。つまり、「協力者会議」が述べるように、「学校は、児童生徒が不登校とならない、児童生徒にとって魅力ある学校づくりを主体的に目指すことが重要」なのである。一言で言えば、子どもたちにとって、学校における、とりわけ学級における「望ましい友人関係の構築」が最も重要だということになる。そこで私は、「学級における望ましい人間関係作り」のためのアプローチの一手法として、現在、学校現場等で数多く実践され、高い評価を受けている國分康孝氏の理論にもとづいた「構成的グループエンカウンター」を通しての人間関係作りをサブテーマに据え、実践検証することにした。

さらに、もう一つのサブテーマについて述べたいと思う。

後述する「2. 事例から」でも触れることになるが、不登校児童を抱えた学級担任は、そうではない学級担任に比べると、精神的にも、肉体的にも、すべての面でかなりの辛苦を背負うことになる。私は経験からもそう思う。

今日の教師の仕事は多忙を極めており、通常でも際限がないとよく言われている。それは私も実感するのだが、しかし、不登校児童生徒を担当すると、その通常の仕事の上に、さらに困難な大きな仕事の一つ増えるのである。そしてその仕事の多くが、思うような良い結果が出ずに、教師は、教師という仕事の限界を痛感し、教師としての自分の力量に疑問を持ち、挫折しかねないものなのである。

個々の不登校児童に、あるいは保健室登校児童に、遅れた学習支援等の十分な援助や保護者を含めた対応(教育相談)を施し、再発を可能な限り抑えるには、担任独りの力では、物理的にも、到底無理があると考えられる。ここに「校内におけるサポートチームづくり」の意義があり、必要性があると考える。

以上、私が述べるまでもなく、また「協力者会議」も「個々の教員を援助する校内体制づくりについては、(略)、管理職や養護教諭等関係職員が、スクールカウンセラー等も加えて、定期的な会合を開き、当該児童生徒を支援していく校内サポートチームをつくるのが有効であると考えられる」と述べており、ここに私のサブテーマ(校内サポートチームづくりを通して)を設定した理由がある。

さらに「協力者会議」は、「不登校については、特定の子どもに特有の問題があることによって起こることとしてではなく、どの子にも起こりうることとしてとらえ、略・・・」と述べているが、これはまさに、私の経験からものを得た指摘であると考え。この指摘を受け、私の経験した事例を述べてみることにする。

2. 事例から

本校に赴任した3年前、8年ぶりに学級担任をすることになった。前任校において、音楽専科を担当していたので、直接的に不登校児童と関わることはなかったが、赴任したその年から3年間、私の担任としての不登校児童との関わりが始まった。

一年目に出会った児童（4年女子）は、かなり個性的且つ多少神経質な子で、3年生の夏休みに経験した重度の船酔いがきっかけで、その後不登校・保健室登校を繰り返していたとのことである。

四年生に進級しても、4月の中旬あたりまで保健室登校を繰り返していたが、担任の私が特別な取り組み（対応・関わり）を持たなくとも、その後、完全に学級に復帰し、無事に五年生へと進級していった。特徴的なことといえば、学級に仲のいい友人（その子に意図的に、積極的な関わりも持たせた）がいて、その子と音楽部に入部し、部活動を夢中に始めたことくらいだろうか。

翌年、五年生の担任をすることになり、その際、気になる子（問題傾向のある子）として、一人の男子児童をいわゆる持ち上がりで担任することになった。

かなり複雑な家庭（両親が離婚し、祖母が他の異父兄弟と一緒に育てていた）の子で、級友への乱暴や学習用具の忘れ物等、生徒指導上でも学習指導上でも多くの問題を抱えていた子ではあった。しかし人間的には、情のある優しい子で、四年生の頃から私にかなり懐いており（いわゆる愛情不足の子で、私に父親の愛情を求めていたのかもしれない）、1・2学期は何事もなく過ぎたが、3学期の始め頃から突然不登校が始まった。

不登校のきっかけや原因については、今もってまったく分からない。その頃、この子の身の回りで起こった変化といえば、長年本土で暮らしていた母親が突然現れたことくらいだろうか。結局私は、元のやんちゃな彼の姿を見ることなく6年生へ進級させてしまった。

昨年、再度5年生を受け持つことになり、母子家庭の子ではあったが、まったく違った態様の男子児童を担当することになった。かなり落ち着きのない乱暴な子ではあったが、5月頃までは不登校の何の兆候も見せず（もしかして見せていたかもしれない）元気よく登校し、6月頃から断続的な不登校が始まった。

担任の私には、学校へ、学級へ行けない理由をまったく話してくれなかったが、養護教諭やスクールカウンセラーには、徐々に話し始めていたようである。私はまったくその子の気持ちが理解できずに、単なる怠け・甘え・わがままではないかと、心のどこかで決め付けていたように思う。というのは、学級に来たときは、不登校児童とはまったく感じさせないほど教室を元気に走り回ったり、級友に乱暴をしたり、私にも、何事もなかったかのように、身体を寄せ気軽に話しかけてきていたからである。

『教室に霊がいるから学級に行きたくない』と言っている」と、教室に行けない具体的な理由を養護教諭から聞かされたのは、だいぶ後（2学期の半ば頃）であった。その後、担任・保護者・養護教諭・スクールカウンセラーとの話し合いの中から、この子の場合、「母子分離」ができていないのが主な原因で、「集団への不適応・怠け・学業不振・霊」など、複数の要因が重なっていると分かってきた。

結局私は、その子も学級へ復帰をさせることなく、何もしてあげることもなく、6年生に進級させてしまった。

以上私の関わってきた3名の子どもたちとの出会いは、ある意味、私にとって衝撃的な体験であった。まさか、自分の学級から不登校・保健室登校児童が出るとは、夢にも思っていなかったからである。ちょうど20年の教員生活を無事に過ごし、子どもへの理解に、関わりに、自信を持ち自惚れていたのかもしれない。そして「なぜ？」と、私は思い当たる原因を探し始めたのである。

事例1の場合、旧担任や養護教諭からの情報と保護者からの話から、ある程度、原因を把握できていたので、その子の気持ちもある程度理解ができ、指導や対応に迷うことはなかったように思う。

しかし、事例2と3の場合は、どうしても原因が分からず、そして原因が分からないのは、何も周りの大人（保護者・担任・養護教諭）だけではなく、当事者の子ども自身にも分からなかったようなのです。そうとも知らない私は、「どうした？何かあったのか？先生に話してごらん。」と、ただ詰問を繰り返すのみだったのである。

私は、担任として、どうしても理由を知りたかったが、何度理由を聞いても、ただ黙って、何も話してくれないその子たちに、もどかしさと苛立ちさえ感じていたのである。と同時に、担任として、目の前のその子の何の力にもなれない焦りや無力感を確かに感じていたのである。

原因が、いじめや学級における人間関係や私の不適切な言動や学業不振など、私自身にあれば打つ手はある。「原因となっている事柄を私が正せばいい」、「適切な処置・対応・指導を施せばいい」、そうすれば、「何とか解決できる、学校に、学級に戻ってきてくれる」と、考えたのである。しかし、原因がまったく分からなかったり、心因性あるいは複合型であったり、担任の私が入り込めないプライベートな家庭での問題であったり、あるいは、これらが複雑に重なっていると、「どうしようもない、手に負えない、為す術がない」と思え、自信を失くし始めていた。

多くの不登校児童がそうであるように、この二人の男子児童も複数の要因が重なり、典型的な「複合型」の不登校児童であり、為す術を持たない私は、その子たちに、無理強いだけはやめようと心の決め、「いつでもおいで。みんなが待っているから。がんばれよ。」と叱咤激励を繰り返すだけだったのである。

学級の他の子どもたちには、その子の状況をについてできる限り説明し、「戻ってきたときは、何で？何で？としつこく聞かないで欲しい。」と理解と協力を求めました。そして、その子への学習指導や保護者との対応の多くを、結果的には、養護教諭とスクールカウンセラーに委ねてしまった。決して、面倒だから手抜きをしようというのではなく、保健室がその子にとって、居心地の良い場所であるならば、「仕方がない、そのほうがいいのかも知れない。」と、逆に、多少の嫉妬と悔しい思いをしながら、早く回復するのを、学級に戻ってくるのをただひたすら待つだけだったのである。

今回、こうして学校現場を離れ、この3年間のこの子どもたちとの関わりを振り返ってみると、「ああすればよかった。こうすればよかったかもしれない。」と、学級担任としての対応のまずさやいたらなさを痛感し、担任としてのいくつかの課題がはっきりと見えてきた。

まず第一に、その子にとって（いや、他の子どもも含めて）、私の担任する学級が、温かな人間関係をベースにした、「魅力ある居心地の良い学級」ではなかったということ。

第二に、昔と違う現代の子どもの特徴や傾向を把握できていなかったことから、目の前の一人一人の子どもたちや子ども集団の特徴や傾向への理解等、「真の児童理解」が足りなかったということ。（もちろん、理解に基づく対応も含めて）

第三に、多少第二と重複すると思うが、不登校になる前に、普段の学校生活の中で、その子たちが出していたはずの何らかのサイン（兆候）に気付かなかったこと（早期発見・早期対応）。

第4に、不登校の段階や子どもの状況に応じた「より適切な対応（援助の仕方・方法）」にきめ細やかな配慮が足りなかったこと。

第5に、信頼関係に基づく保護者との相互理解と連携ができていなかったこと。

第6に、担任独りの力ではすべてに対応することが困難であることに気づかずに、学校としての組織的な対応（サポート）ができていなかったこと。

以上が私自身の教員生活での経験であり、そこから生まれ出た私の担任としての課題であり、テーマを設定の理由でもあり、同時に、上記した課題こそが、私の研究内容である。

そこで、半年間という短い研究期間の制限からサブテーマを二つに絞り込んで検証していくことにした。

一つは、第1の「魅力ある居心地の良い学級」にするためにどうするかです。

独りの人間として欠点もある中で、お互いの良さを確認し合い、温かい受容的な信頼関係に結ばれた学級を、子どもたち同士の間人間関係を、どう構築していけばいいのかと考えました。そして、数多くの文献や本を読破していくなかで出会ったのが、「構成的グループエンカウンター」によるアプローチでした。この方法で、自分の学級を実践検証してみようと思います。

もう一つは、検証が難しいのではないかと思います。第6の「校内サポートチームづくりを通して」を検証してみたいと思います。

II 研究目標

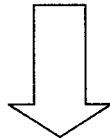
- 学級担任として、不登校児童を出さないために、日常の教壇実践の中で、何をなすべきなのかを明らかにすると同時に、不登校児童が出た場合の「望ましい対応のあり方」を研究する。
- 不登校児童を出さないための、学級における好ましい人間関係を構築できるであろう「構成的グループエンカウンター」を取り入れた実践を実施し、検証してみる。
- 学校の「教育相談」はどうあるべきかを研究し、不登校児童への校内におけるサポートチームづくりはどうあるべきかを研究する。

III 研究仮説

- 1 構成的グループエンカウンターを実践することにより、児童は自己理解己解他者理解が促され、学級における望ましい人間関係が構築できるであろう。
- 2 校内におけるサポートチームを作ることによって、学校不適應児童（不登校児童）へのより効果的な援助が可能になるであろう。

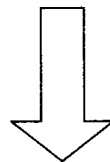
社会（教育界）の課題・要請

不登校児童生徒の増加



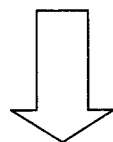
不登校児童との出会い

反省・課題



研究仮説

1. 構成的グループエンカウンターを実践することにより、児童は自己理解己解他者理解が促され、学級における望ましい人間関係が構築できるであろう。
2. 校内におけるサポートチームを作ることによって、学校不適應児童（不登校児童）へのより効果的な援助が可能になるであろう。



目指す児童像

○社会的自立のできる児童

○自己指導力を発揮できる児童

V 研究内容

1 真の児童理解とは

学級担任が、望ましい人間関係をベースにした学級経営を運営していくためにも、不登校児童を自分の学級から出てしまうのを未然に防ぐためにも、あるいは出てしまったときの適切な対応を施していくためにも、「真の児童理解」は、担任教師にとって、最も重要且つ不可欠なものであると考える。なぜなら、目の前の個々の子ども一人一人の、あるいは、子ども集団の理解なしでは、到底効果的な指導・援助・対応は不可能だと思うからである。

それでは、「真の児童理解とは」どういうことであろうか。視点は三つあると考える。

一つ目は、現代日本の社会的問題（少子化・核家族化・価値観の多様化・家庭教育力の低下・高齢化・情報化・塾・人間関係の希薄化・孤立化等）の影響をまともに受けて育ってきた子ども全体の特徴の理解である。

二つ目は、学級担任としての使命感と愛情と深い洞察力に支えられた、目の前の子ども一人一人への深い理解である。

そして、三つ目は、先に述べた「一人一人の理解」に基づいた、裏付けられた学級（子ども）集団の理解である。

では、一つ目でいう現代日本の社会的背景の中で育ってきた子ども全体の特徴とはどんな子どもたちであろう。それは、今の子どもたちがよく口にする「ムカつく」「キレル」に象徴されていると考える。

今の子どもたちは、自分の気に入らないことがあると、すぐに「ムカツキ」「キレテ」しまい、何をしでかしてしまうのか分からないのである。そのことは昨今の凶悪少年犯罪がそれを如実に表している。かつての子どもたち（私も含め）も悪いことはしてきた。しかしそれは、今のそれとは質的に違い、窃盗や喫煙等に代表される、いわゆる「反社会的・非社会的行為＝少年非行」であり、それは誰しものが多少なりとも経験していく大人への成長過程（一過性）の過ちだったのである。

河村茂雄氏はその著書『エンカウンターで学級が変わる』の中で、「気になる最近の子どもの特徴」として以下のように述べている。

- ・あきっぽく、がまんできない
- ・傷つくこと、失敗することをとても恐れる
したがって、食わずぎらいである
- ・欲求充足志向。面白くないことはしない。
- ・対人関係を自ら形成できる子どもが少ない。
その意欲も少ない。
- ・個人的なしつけができていない。集団生活のマナーを理解していない。
- ・うぬぼれが強く、自己主張的である。
- ・他人の気持ちを察することができない。
- ・話す内容は大人だが、心をととても幼い。
- ・周りに流されやすい。ことの善悪よりも多数派につく。
- ・知識と具体的な行動が一致してない。

要するに、社会性や人間関係のもち方、自己の確立、現実判断能力、道徳心に欠けるといっわけである。と。

以上の河村氏の指摘は、確かに今の子ども像の「一般論」であろう。しかし、私たち教師は、かつての子どもたちはこうであったと、懐古的な見方をするのではなく、氏の述べているように

「最近の子どもの特徴」を理解し、目の前の子どもたちに接したほうが、「真の児童理解」には大いに役立つであろうと考えるのである。

次に、二つ目と三つ目の視点について述べたいが、日々子どもたちと正面から接している私たち学級担任にとっては、目の前の「子ども一人一人の理解」「学級（子ども）集団の理解」の方が、「学習指導」上からも「生徒指導」上からも、ひいては、「不登校児童を出さない望ましい学級経営」上からも重要だと考える。

では、子どもを深く理解するためには、我々学級担任はどうあるべきなのであろうか。子どもを深く理解するためには、どんな方法があり、どの方法が効果的なのであろうか。

このことについて、杉原一昭氏は、「子どもを深く理解するためには、理解のためのいろいろな方法を組み合わせる用いることが必要になる。しかし、その前提条件として以下のことを肝に銘じておきたい。」と述べ、教師側のあるべき姿を強く指摘している。それは、まず第一に「共感的理解」であり、第二に「教師自身が自己開示をすること」であると、その重要性を指摘している。

では、杉原氏のいう「共感的理解」とは、どういうことであらうか。換言すれば、それは、「子どもの感情を自分の感情に移しかえて捉えることである。」つまり、子どもの今現在置かれている立場や状況に規定される子どもの気持ち・感情・想いを自分に置き換えて考えてあげるべきだということである。そしてそのためには、「話をじっくり聴くこと」、子どもの言うことを「受容する」ことが大切であると述べている。

さらに、「教師自身の自己開示」については、「教師が自己開示できることは大切なのである。教師が自分の子ども時代の話や失敗談などを話すと、子どもとの関係が身近なものになる。教師も自己開示することによって子どもとの相互理解が深まる」とし、子どもを理解する方法として、「日常生活を観察する方法、子どもや親と面接する方法、子どもの作文や日記などを用いる方法、質問紙法や各種の心理検査を活用する検査法、ゲスフーテストやソシオメトリックテストなどのように友人関係を調査する方法などさまざまある。目的に応じて、最適なものをつかえばよい。また、一つの方法を詳細に検討することも可能であるが、いくつかの方法を組み合わせたり、テストバッテリーを組むことを考えてもよい。深い子ども理解のためには、多くのモノサシ（評価尺度ないし観点）を用意してあるほうがよいのである。」と述べているのである。

以上、述べてきたことを十分考慮に入れ、駆使しながら、学級担任は、日々の学校生活の中で、積極的に子どもとの関わり合い（コミュニケーション）を多く持ち、アンテナを張り巡らせていかなければならないと考える。そうすることによって、今、この子が、この子たちが、「どういう状況に置かれ、何を求め、何を悩んでいるのか」を理解・把握することができ、今、この子に、この子たちに、「どんな支援を、どんな方法で」施していかなければならないのかが、見えてくるのである。そして、理解した事柄（家庭環境・性格・気になる会話・出来事等）は、個人指導記録簿等に記録しておくことが、その時点での、あるいはその後の指導の上でも、大いに役立つと考える。

2 質問紙法による児童の意識（実態）調査と考察

上述の「子どもを理解するいくつかの方法」の中から、今回「質問紙法」によって、本校の4年生から6年生までの児童を対象に、私自身が作成した「悩みアンケート」を実施した。以下にその結果と考察について述べる。

設問1の「あなたはなぜ学校へ来るのですか。」という学校へ来る理由の質問に対して、最も回答が多かったのは「友達がいるから」で、続いて「勉強したいから」、「勉強しなければいけないから」の順であった。

このことから、子どもたちにとって、やはり友人の存在は大きく、友人がいるから学校へ行け

る。また、行きたくにもなるようである。逆に言えば、友人関係が悪ければ学校へは行きたくなくなり、友人との関係が改善され良くなれば、子どもたちにとって、学校は楽しいものであるといえるのではないだろうか。

設問2-1の「あなたの学級は楽しいですか。」という質問に対して、約半数以上(58%)の児童が「楽しい」と答え、約3分の1(36%)の児童が「ふつう」、5%(21人)の児童が「楽しくない」と答えている。

このことから、本校の高学年の児童の60%近くは、学校生活をエンジョイしていることがわかる。我々学級担任は、日々の授業で、「わかる楽しい授業」を展開し、子どもたちが楽しく思えるような教育活動を導入し、友人同士が仲良くなり、楽しくなる人間関係を構築しなければならないと考える。

設問2-2の『楽しい』と答えた人に質問します。楽しいと思う理由を下から選んでください。』の質問に対して、最も回答が多かったのは、「仲のいい友達と遊べるから」(37%)、次に「学級にいること自体が楽しいから(いごこちがいい)から」(16%)、ついで「先生がおもしろい(好きだ)から」(15%)の順であった。担任としては、「学級にいること自体が楽しいから(いごこちのための工夫が必要となるだろう)。

設問2-3の『楽しくない』と答えた人に質問します。楽しくないと思う理由を下から選んでください。』の質問に対して、最も回答が多かったのは、「学級にいること自体が楽しくない(いごこちが悪い)から」で、次に「仲のいい友達がないから」、「先生がおもしろくない(嫌いだ)から」の順であった。

「学級が楽しくない」と答えた児童は、回答者全体の5%で、比率的には、そう多いとは思えないが、この子どもたちがいわゆる「気になる児童」であり、担任が普段から注意深く目をかけてやらなければいけない子どもたちであることはいままでもない。

設問3の「あなたが今困っていることや悩んでいることは、どんなことですか。当てはまるものに○をつけ、当てはまる理由の記号にも○をつけてください。」の質問に対して、最も数字が高かったのは、やはり「勉強のこと」(34%)で、ついで「友達のこと」(24%)、そして「家族のこと」(15%)であった。

本校の高学年の子どもたちは今、「学習関係」・「友人関係」・「家族関係」のことで困り、悩んでいることを我々教師は理解・把握し、なんらかの手立てを講じなければならないわけである。

設問4の「あなたが今、先生たちにこうしてほしいと思うことはどんなことですか。」の質問に対して、126人(32%)の児童が「もっと勉強を楽しく教えてほしい」(1位)と答え、98人(25%)の児童が「もっと学級を楽しくしてほしい」(2位)と答え、61人(16%)の児童が「もっと勉強を分かりやすく教えてほしい」(3位)と答えている。

このことから、子どもたちの多くが、学習を楽しく分かりやすく教えてほしいと我々に要求していることが分かる。そして、学習の次に、自分の所属する学級を楽しくしてほしいと求めているのである。

以上、見てきたように、一つの方法(質問紙法)からでも、子どもたちの想いや悩みが理解することができるのである。

我々教師は、子どもたちが素直に自分の「想い」や「悩み」を出せるような機会や援助を、絶えず施し、「真の児童理解」に努めなければならないと考える。そして、このような子どもたちの率直な声や想いを謙虚に受け止め、理解し、解決の方法を模索・提示しなければならないと思うのである。

3 魅力ある学級とは

ところで、「魅力ある学級」とは、いったいどんな学級を指すのであろうか。

文部科学省の協力者会議(平成15年4月)はその報告の中で、「具体的には児童生徒にとって、自己が大事にされている、認められている等の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる『心の居場所』として、さらに、教師や友人との心の結びつきや信頼感の中で主体的な学びを進め、共同の活動を通して社会性を身に付ける『絆づくりの場』であると述べている。

これに加えて、私は、子どもにとっての「魅力ある学級」とは、(1)で述べてきた担任教師による「真の児童理解」に基づいた、担任教師対児童及び児童対児童のリレーション(温かい感情交流=ふれあい・人間関係)が成立した、受容的(素直な自分を出せる・受け入れてくれる)な雰囲気漂う「居心地の良い学級」だと考えるのである。

ちなみに、片野智治氏は、「ふれあいは子どもたちの中に自信を生む。勇気を生む。耐性を生む。そして、何よりも自由感と他者への感謝の気持ちと責任を育む。ふれあいこそ、いじめ・不登校の増加をくいとめる、と確信している。」と述べ、学級における子どもたち同士の「心のふれあい」の重要性について、示唆に富んだ発言をしている。

学校(学級)は本来、難解な学問を「学習する場」であり、友人同士の「ぶつかり合いの場」であるが、反面ふれあいのある、居心地の良い学級であり、明日も学校(学級)に行きたくなるような学級が、魅力ある学級なのだと考える。一般的に、今の子どもたちは人間関係が希薄であるがゆえに、好ましい人間関係を作り出すのも、好ましい人間関係を維持していくのも、いったんこじれた人間関係を修復するのも苦手だという指摘をよく耳にする。それは、近年の社会現象であるところの「少子化」・「核家族化」等が子どもたちの社会的(社会性の)成長に大きな負の影響を与えているからに他ならないのである。

かつての子どもたちは、生活の中心である「家」において、家族との「ふれあい」の中で、家族からの(特に親)からの「愛情」を受け、「躰」られ、「礼」を学び、「道徳心」を培ってきたのである。そして、近所の同年代の子どもたちとの「遊び」の中で、あるいは、遊びに伴う小さな「けんか(争いごと・ぶつかり合い)」を通して、他人とのふれあいを体験し、他人を知り、わがままの通用しない「ルール(規範)」を学び、「忍耐力」を身に付け、他人とうまく付き合っていくいわゆる「社会性」を少しずつ学んでいったのである。

しかし、前述した近年の社会現象である「少子化」や「核家族化」や「価値観の多様化」や「遊びの喪失」によって、これまで成長していく中で自然に身につけてきた「社会性」や「ふれあい」が今、子どもたちの中に欠如しつつあるのではないだろうか。

我々教師は、そういったこれまでの子どもが就学以前に、あるいは、就学後の成長過程で身につけてきたはずの「社会性」が欠如した子どもたちを日々教育しているのである。

さらに、今の子どもたちに欠如しているのは、「社会性」ばかりではなく、「自己理解」・「自己肯定感」・「自己受容」・「他者理解」・「他者受容」等の心が弱くなり、それが、「自己劣等感」を生み、「自己劣等感」が心の「閉鎖性」を生み、そのことによって、子ども同士の交流=本音と本音の「ふれあい」を奪っていく構図が見えてくる。こうしてみると、そういった子どもたちが通う学校で、「学校不適応児児童」が増加していくのも、考えてみるとある意味では、自然で、無理のない話なのかもしれない。

翻って、それでは一体どうすればいいのか。その一つの答えとして、かつて「家」で、あるいは「地域の子どもの集団」で培われてきたものを、学校で引き取ることである。学級担任が、学級という子ども集団の場で、子どもたち同士の「本音と本音が出せる場」を、「ふれあう場」を、「自己理解や他者理解」ができるよう、「自己理解や自己受容」ができるよう、仕組んでいくのである。その仕組んでいく一つの方法が、「構成的グループエンカウンター」なのである。

4 構成的グループエンカウンター（以下SGE）とは

構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter, 略称SGE）とは、1970年代半ばに、国分康孝氏によって、わが国に紹介・普及された集中的グループ経験の一つで、開発的カウンセリング（『育てる』カウンセリング）の一技法として、人間関係開発やサイコ・エジュケーションの一方法として用いられている。

国分久子氏は、著書『エンカウンターとは何か』の中で、「エンカウンターの本質は、エクササイズを介した《自己開示》、自己開示を介した『リレーション作り』、リレーション作りを介した（自己・他者・人生の発見）にある。」と述べている。

言い換えると、「構成的グループエンカウンター」とは、一定の枠（構成＝時間やルールや人数等）の中で、与えられたエクササイズを集団（グループ）で体験し、シェアリング（ふりかえり）をしていく中で、子どもたちに自己開示力を育て、自己開示を通して（本音と本音の交流）望ましい人間関係（ふれあいのある関係）を作り出し、望ましい人間関係を作り出す中で、子ども一人一人の心の中に、心理面の発達を促す課題（自己理解・他者理解・自己受容・自己主張・信頼体験・感受性）を育てていく一技法であると解釈できる。

5 「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U（以下）」とは

Q-Uテストとは、現在の学級集団の状態を的確に把握する「学級満足度尺度」と児童の意識を測る「学校生活意欲尺度」の二つの診断尺度と自由記述アンケートから構成され、担任教師の日常の観察法や面接法による児童理解の限界を補い、児童個々の状態及び学級集団の状態を理解・把握するための信頼性・妥当性の高いテスト（資料）として学校現場から高い評価を得ているものである。

VI 構成的グループエンカウンターによる検証授業（指導案）

学級活動学習指導案

平成15年9月11日（木） 5校時

大山小学校4年2組（男子17名 女子18名 計35名）

授業者 西俣 尚志

題材名 エクササイズ「ほめあげ大会」

1. 題材設定理由

(1) 指導観

学級担任にとって、自分の学級から不登校児童が出てしまい、その子の何の力にもなってやれないことほど辛いものはない。自分自身の教師としての力量や資質に疑問を持ち、自信を失

くし、悩み、苦しんでしまうからである。

例え、自分の指導した学習内容がなかなか定着しない子どもたちばかりであったとしても、例え、躰が身につけていない粗野な子どもたちばかりであったとしても、例え争いごとの絶えない学級であったとしても、いつも学級の仲間全員が揃い、ぶつかり合いの中にも温かい人間関係がそこにあり、日々の子どものやりとりの中に、子どもといっしょに腹の底から笑える場面があれば、教師はなぜか救われるものである。ちょうど「金八先生」のような青春学園ドラマのように・・・。

不登校児童を自分の学級から出さないためには、学校の存在それ自体が子どもたちにとって、難しく厳しい学ぶ場所であったとしても、学級が楽しく居心地のよい場所、なぜか明日も行きたくなるような魅力ある場所であってはならない。そのためには、何よりも子どもたち同士、あるいは子どもと担任教師との、望ましい人間関係（リレーション）の構築が重要になると考える。その望ましい人間関係を作り出す一つのアプローチの方法が「構成的グループエンカウンター」であると考える。

(2) 構成的グループエンカウンターについて

構成的グループエンカウンター (Structured Group Encounter, 略称 SGE) とは、1970年代半ばに、国分康孝氏によって、わが国に紹介・普及された集中的グループ経験の一つで、開発的カウンセリング (『育てる』カウンセリング) の一技法として、人間関係開発やサイコ・エジュケーションの一方法として用いられている。

国分久子氏は、著書『エンカウンターとは何か』の中で、「エンカウンターの本質は、エクササイズを介した《自己開示》、自己開示を介した『リレーション作り』、リレーション作りを介した (自己・他者・人生の発見) にある。」と述べている。つまり「構成的グループエンカウンター」とは、一定の枠 (構成=時間やルールや人数等) の中で、与えられたエクササイズを集団 (グループ) で体験し、シェアリング (ふりかえり) をしていく中で、子どもたちに自己開示力を育て、自己開示を通して望ましい人間関係を作り出し、望ましい人間関係を作り出す中で、子ども一人一人の心の中に、心理面の発達を促す課題 (自己理解・他者理解・自己受容・自己主張・信頼体験・感受性) を育てていく一技法であると解釈できる。

(3) 題材観

人は他人の悪口はよく口にしますが、他人の良さを面と向かって口にすることは少ないと思われる。多くの場合、人は、その友人が何かの原因で自信を失くし悩んでいるとき、その友人を何とか励まそうと、自信を持たせようとほめる。人が、他人をなかなかほめることができないのは、照れや恥ずかしさが働いているせいなのかも知れない。しかし、人が他人をなかなかほめてあげることができないのは、なにも大人社会のことだけではない。それは、子ども社会においても同様であると考えられる。

今回実施する題材 (エクササイズ) 「ほめあげたい会」は、先に述べたように、日頃「ほめ合う」ことの少ないと思われる子どもたちに、あらためて互いの良さを考えてもらい、大いに「ほめ合おう」とするものである。

具体的には、まず、偶然出会ったグループ (5人) の自分以外の4人の良いところを二つだけカードに記入してもらおう。(一人で4人の良いところを二つずつ書くことになる)

次に、そのカードを本人に手渡して見てもらう。カードに記入されたほめられた内容の中から、自分でも納得できる内容に○を、納得できないものには×を、分からないものには△をつけていく。

さらにシェアリングの場面では、○をつけた中から、一つだけをみんなの前で発表してもら

う。その際、他の児童には、共感した内容に、惜しみない大きな拍手をしてもらう。そして最後に、今の気持ちや今日の授業の感想を「ふりかえりカード」に記入していくことになる。

この題材のねらいの一つは、本時のねらいでも述べるが、友人からほめてもらうことによつての「自己理解・自己受容」であり、「自己肯定感・自信の回復」である。

他人にほめてもらうことを嫌がり、気を悪くする人は少ないであろう。逆に、ほめてもらった人のことを、これまで以上に好意的、友好的に見ることができる。人は、好意的にその人を見ることができるようになると、なぜかその人に優しくなれるものである。もちろん、そこには、自分でも、そうかもしれないと納得できる根拠がなくてはならない。そうでなければそれは、単なる「お世辞」になってしまう。

もう一つのねらいは、友人の良さを見つけ出す「他者理解」と友人を肯定的にみようとする友好的な「思いやり」の心を育てることである。

授業のねらい達成のポイントは、子どもたちが友人の良さを見つけ出すことができるかどうかである。そしてそれは、子ども同士の日常の関わり方や人間関係が大きく影響してくると考えられる。

この題材（「ほめあげたい会」）は、以上のねらいを達成するために、有効かつ適切な「エクササイズ」であると考える。

(4) 児童観

① Q-Uテストの結果から（6月4年2組）

夏休みに入る少し前、学級における児童の実態を把握するために、Q-Uテスト（国分 康孝 総監修）を実施した。

このテストは、学級集団の状態を的確に把握する「学級満足度尺度」と児童の意識を測る「学校生活意欲尺度」の二つの診断尺度と自由記述アンケートから構成され、担任教師の日常観察や面接法による児童理解の限界を補うものとして、信頼性・妥当性の高いテスト（資料）と学校現場から高い評価を得ている。以下、その結果を考察したい。

侵害行為認知群	学級生活満足群
学級—23%（8人） 全国—15%	学級—46%（16人） 全国—40%
学級生活不満足群	非承認群
学級—11%（4人） 全国—25%	学級—20%（7人） 全国—20%

（結果・考察）

まず、学級生活満足群（学級内に自分の居場所があり、学校生活を意欲的に送っている児童）に所属する児童の割合に注目すると、全国平均40%に対して、本学級の児童は46%であり、全国の平均値よりも高いということが分かる。つまり現在の学級生活に満足している児童は、学級の半数弱の児童（16人）であり、残りの半数強の児童は満足していないことが分かる。

次に、学級生活不満足群（耐えられないいじめや悪ふざけを受けているか、非常に不安傾向が強い児童）に所属する児童の割合に注目すると、その割合は、全国平均よりも低いですが、4人の児童が何らかの形で悩み、非常に不安傾向にあることが分かる。担任としては、早急に個別に関わり（カウンセリング）を多く持ち、その子の悩みや思いを聞いてやり、適切な対応をする必要がある。

次に、非承認群（いじめや悪ふざけを受けてはいないが、学級内で認められることの少ない児童）に所属する児童に注目すると、全国平均と同じ割合であることが分かる。その7人の児童に

については、常日頃から注意して目をかけてやり、その子の良さを最大限に引き出し、級友に認めさせるなどの配慮が必要になる。

最後に、侵害行為認知群（いじめや悪ふざけを受けているか、児童とトラブルがある可能性が高い児童）に所属する児童に注目すると、全国平均の数値よりもかなり高い。本学級の大きな特徴だと言えるかもしれない。担任としては、児童同士が仲良くなれるような機会を意識的に設定していく必要がある。

以上考察してきたように、現在の学級生活に満足している児童は学級の半数以下である。ここにグループエンカウンターを実施する意義があると考ええる。教師は、できるだけ多くの児童が、学級生活に満足できるよう、様々な取り組みや手だてを施す必要があると考ええる。

② 担任から

○男女の仲は割と良いほうだと思う。男女ペアで漢字テストを交換させて解答させたり、席替えや給食時間中のトラブルもほとんどなかった。当番活動を頑張る子が多く、掃除や給食準備も速い。

学習面では、「教室は間違うところ」をモットーに「発表してみたい人」、「読んでくれる人」、「意見を板書してくれる人」の発問に、だいたい8人くらいの挙手がある。

③ 授業者から

○本時までには、この子どもたちと私が接したのは、授業としては、4時間程度である。よって、この学級の児童の実態を十分把握しているとは言えない。それでも、この間の関わりの中で見えてきたことは、4年生の発達段階に比較すると、かなり若い児童が多く、よく言えば、子どもらしい天心爛漫な伸び伸びとした子が多いといえるだろう。逆に、学習態度（話を聞く・指示に従う等）が今一つ身についておらず、これからの大きな課題だと思う。

○2学期を向かえてすぐに、仲間意識を育て、親睦・交流を深めるために、構成的グループエンカウンターを実施した。エクササイズは「ジャンケン勝ち抜きゲーム」と「聖徳太子ゲーム」である。このエクササイズ自体が、かなり楽しい要素を持っているため、子どもたちは仲良く、実に楽しそうにグループでの話し合いに参加し、この活動の目的は達成できたように思える。また、「ふりかえりカード」への記入も、どの子も「とても楽しかった！もっとしたい！」等と書いてくれたが、シェアリングの場での感想の発表の場面では、数名の児童のみが発表しただけで、人前で自分の意見や思いを表現するのは、苦手ようである。

2. 本時のねらい

① 同じグループになった仲間（級友）の良い所を見つけ出し、ほめてあげる（カードに記入）することによって、クラスの友達みんなを肯定的・友好的にとらえさせ、思いやりの心を育てる。

② 級友からほめてもらうことによって、自分自身の良さに気づかせ、それによって「自己理解」・「自己受容」・「自己肯定感」を持たせる。

3. 授業仮説

① お互いをほめ合う場を設定することによって、級友の良さを発見（他者理解）し、級友を肯定的かつ友好的な思いやりのある気持ちでとらえなおすことができるであろう。

② 級友にほめられた内容を、みんなの前で発表する場を設定することによって、自分の良さに気づき（自己理解）、級友から受容される喜びを味わうことができ、「自己受容」・「自己肯定感」が高まるであろう。

4. 本時の展開

学習活動（場面）	教師の発問・指示と子どもの反応	留意点
<p>（インストラクション）</p> <p>1. グループ作り</p> <p>①同じ動物のカード同士のグループを作る</p> <p>②グループの世話係りを決める</p> <p>2. 導入</p> <p>①ほめられた経験を思い出しそのときの気持ちを考える</p> <p>②ゲームの趣旨を聞く</p> <p>③ゲームのやり方を聞いて、理解する</p> <p>（エクササイズ）</p> <p>①同じグループの4人の級友に関して、1人2つずつ、良いところを考え、カードに記入していく</p>	<p>○「これから不思議な縁で出会ったグループ作りをします。同じ動物のカードの人とグループを作ってください。」</p> <p>●「パンダだ。やったー！同じグループだよ。」</p> <p>○「グループの世話係りを決めてください。」</p> <p>「では、できあがった5人のグループでこれから、あるゲームをしたいと思います。その前に質問、みんなは友達にほめてもらうことって、よくある？」</p> <p>●「あまりない」・「あるよ」</p> <p>○「先生やお母さんからは、よくほめられるかも知れないけれど、友達からほめてもらうことって、あんまりないよね。でも人にほめられるってどんな気持ち？」</p> <p>●「うれしい」「てれくさい」「分からない」</p> <p>○「そうだよね、うれしいし、気持ちいいよね。それに何となく自分に自信もつくよね。ほめてあげる人も人に喜んでもらうことができるのだから、ほめるっていいことだね。そこで、今日は「ほめあげ大会」というゲームをしたいと思います。やり方を説明しますから、よく聞いてください。」</p> <p>○「これから1人に4枚のカードを配ります。そのカードにグループの4人の人についてほめることを二つずつ書いてください。たくさんほめることがある人は、その中でも「特に」という二つを選んで書いてください。よく考えて、よく思い出して書いてあげてください。守ってほしいことがあります。それは『お世辞は書かないことです』いいですか。」</p> <p>「何か質問はありますか」</p> <p>「では、グループの世話係りの人はカードをもらいに来てください。」</p> <p>「カードをもらいましたか。」</p> <p>「では、始めてください。」</p>	<p>・人と人との出会いはとても大切だということを知らせ、いやな顔をしていないことを約束させる。</p> <p>・ここで時間をかけないように配慮する。</p> <p>・ある子がいれば、発表してもらい、そのときどんな気持ちだったか話してもらう。</p> <p>・ほめられるときの気持ちとほめる意義をしっかりと確認する。</p> <p>・説明をしっかりと聞かせる。</p> <p>・先生の指示を守ることを約束させる。</p> <p>・後で発表することも事前に知らせておく。</p> <p>・お世辞は心からほめたことにはならないことを押さえる。</p>

学習活動（場面）	教師の発問・指示と子どもの反応	留意点
<p>①級友のよいところを思い出 し、カードに記入する</p> <p>②自分でもそうだと思うと ころに○、違うと思うと ころに×、分からないと ころに△をつけていく</p> <p>（シェアリング）</p> <p>①○をつけたところを1つ発 表する</p> <p>②今の自分の気持ちをふりか えり、「ふりかえりカード」 に記入する</p>	<p>●「〇〇さんは、給食当番でもないのに、手伝っ てくれる優しい人です。」</p> <p>●「〇〇さんは、スポーツがとても得意です。」 などと、次々と記入していく。</p> <p>○「はい、やめ！時間です。書き終わりましたね それじゃ、書いた相手の人とカードを交換し てください。」</p> <p>○「では、自分がもらったカードに、自分でもそ うだと思うところに○をつけ、違うと思うと ころに×を付けてください。よく分からない というところに、△をつけましょう。」</p> <p>○「つけましたか。では、○をつけた中から一つ だけ、みんなの前で発表しましょう。 みんなは、発表を聞いて、そうだと思うとき 大きな拍手をしてあげてください。」</p> <p>● 1人1人発表する。</p> <p>● 拍手をする。</p> <p>○級友をほめ、級友にほめられた今の自分の気持 ちを「ふりかえりカード」に記入する。</p>	<p>・教師の例を使って ○×△の付け方を 説明する。</p> <p>・○をつけたものがな かったら、「本人は ×をつけているけ れどみんなはどう 思う？」と返し、自 己肯定ができるよ うに助言する。</p> <p>・自分では良いところ と自覚していない ところも、他人から 見ると長所になり えることにも気づ かせる。</p>

5. 評価

- ① 級友の良さを積極的に発見しようと努め、カードに記入することができたか。
（評価方法：ワークシート及び態度）
- ② 級友がほめてくれた自分の良さを素直に認め、自己肯定感を高めることができ
たか。
（評価方法：ふりかえりカード）

検証授業の様子



いいところみつけた？



えーと、あっ、そうだ！



どれを発表する？



うれしい



今日の授業の感想 発表できる人？



おかしい！たのしい！

(6) 検証授業研究会

【授業者の反省】

- 人間関係を作り出す授業に、自分と子どもたちとの信頼関係ができていないのに、この授業が成立するか不安であった。案の定うまくいかなかった。
- このクラスは、三度「エンカウンター」を入れたが、よく言えば、子どもらしい天真爛漫な子が多く、悪く言えば、基本的なしつけが身につけていないと感じていた。
- 望ましい人間関係を作るための手法として何がベターかと模索していく中で、「構成的グループエンカウンター」に出会い、校内研で聖子先生の授業を参観して、「これはいい！検証授業はこれでいこうと思った。」と思った。
- 昨日、1組さんのクラスを使って模擬授業をしたが、教師（自分）の意図やこのエクササイズのおねらいが、思った以上達成できて、これは本当にいい題材だと思った。
- シェアリングの場で、ほめられることのすばらしさを感じた感想がほとんどだろうと予想していたが、相手をほめることによって、相手が喜び、うれしそうな顔をするのを見て、こっちまでうれしくなったという」感想を聞いて、感動した。
- 昨日は、飛び込みの授業でも、エンカウンターはできるのだと自信を持ったが、今日は逆に、いくら題材が良くても、子どもたちの側に、それ以前の基本的なルール（聞く態度などのしつけ）が身につけてなければ半減することが良く分かり、授業の難しさを今さらながら強く感じた。

【参観者から】

- 導入の際の「縁」の話がよかったし、テンポが良かった。
- 教師の自己開示があってよかった。
- 指示が明確でよかったし、「分かった？」と確認するところが良かった。
- 床に座らせて書くのは、検討すべきではないだろうか。
- 「何分まで」という、時間の指示をすべきだったのでは？
- 自分が欠点だと思っていたところでも、人から見たらいいところであるときもあると、気付く子がいた。
- 自分のものに、白紙があって、がっかりしていた子もいた。

(検証授業の考察・課題)

- 授業後の研究会では、4人の「気になる子」への配慮がまるで見えないとの指摘を受け、そのとおりだと愕然とした。教育相談の領域で、検証授業をするのなら、何度もその学級に足を運び、まず子どもとの関係を作り出すべきだった。補充の先生への配慮が、裏目に出たと反省している。
- 自分のクラスでの授業は、うまくいったとは思えないが、それにしても、子どもたちの感想を読んでいると、「構成的グループエンカウンター」の有効性やすばらしさを確認できる。
- ここでの研修を学校現場に戻って、いかに生かすかが大きな課題だと思う。

① Q-Uテスト（6月と9月の比較）から

9月になって、3回の「構成的グループエンカウンター」を取り入れた。

2学期のスタートということもあって、1回目と2回目の「エンカウンターは」、親睦交流を
もねらったゲーム性の高いエクササイズを選んだ。

1回目が、「勝ち抜きジャンケンゲーム（他者理解）」で、2回目が「聖徳太子ゲーム（信
頼体験）」である。そして、検証授業では、「自己理解」と「他者理解」をねらいとした「ほ
めあげたい会」を選んだ。3回の「構成的グループエンカウンター」を通して、個々の子ども
たちに、学級集団に変化があったのだろうか。

下記の図は、6月と9月に実施したQ-Uテストの結果である。

<p>侵害行為認知群 全国 15%</p> <p>学級・・・6月 8人(23%) 9月 7人(20%)</p>	<p>学級生活満足群 全国 40%</p> <p>学級・・・6月 16人(46%) 9月 19人(54%)</p>
<p>学級生活不満足群 全国 25%</p> <p>学級・・・6月 4人(11%) 9月 6人(17%)</p>	<p>非承認群 全国 20%</p> <p>学級・・・6月 7人(20%) 9月 3人(9%)</p>

図3

(結果・考察)

まず、学級生活満足群（学級内に自分の居場所があり、学校生活を意欲的に送っている児童）
に所属する児童に注目すると、6月には16人だった児童が、3人増え19人になり、学級の過
半数を超えたことが分かる。これは良い結果だといえる

次に、学級生活不満足群（耐えられないいじめや悪ふざけを受けているか、非常に不安傾向
が強い児童）に所属する児童に注目すると、4人から6人に増えている。6月に調査した4人
のほかに、個人的な指導や関わりを持たなければならない児童2人増えたことになる。早急に
対応しなければならないであろう。現在補充をしている先生もこのことは認知しており、現在
取組みの最中であるということである。

次に、非承認群（いじめや悪ふざけを受けてはいないが、学級内で認められることの少ない
児童）に所属する児童に注目すると、6月には、7人の子がいたが、4人も減ったことが分かる。
これも「学級生活満足群」の増と同様に、良い傾向といえる。

最後に、侵害行為認知群（いじめや悪ふざけを受けているか、児童とトラブルがある可能性
が高い児童）に所属する児童に注目すると、1人減っており、もっと効果的なエクササイズを
取り入れる必要があると思われる。

VII 校内サポートチーム（校内支援体制）作りについて

「校内サポートチーム」の目的・機能は、二つあると考える。

一つは、個々の不登校児童及び保健室登校児童への直接的な対応・援助であり、一つは、その子たちの担任教諭に対するサポートだと考える。

児童への具体的なサポート（援助）には、「学習支援」・「世話」・「相談」等が考えられるが、現在の学校現場では、「養護教諭」がその中心的な役割を担っているように思う。

（後で、アンケートに基づく宜野湾市内の実態について触れる）

担任教諭へのサポートには、物理的なサポート（学習支援・相談・世話）とその教諭の相談相手のような精神的なサポートがあると考えられる。これも現在は養護教諭が担っているのが現状であろう。

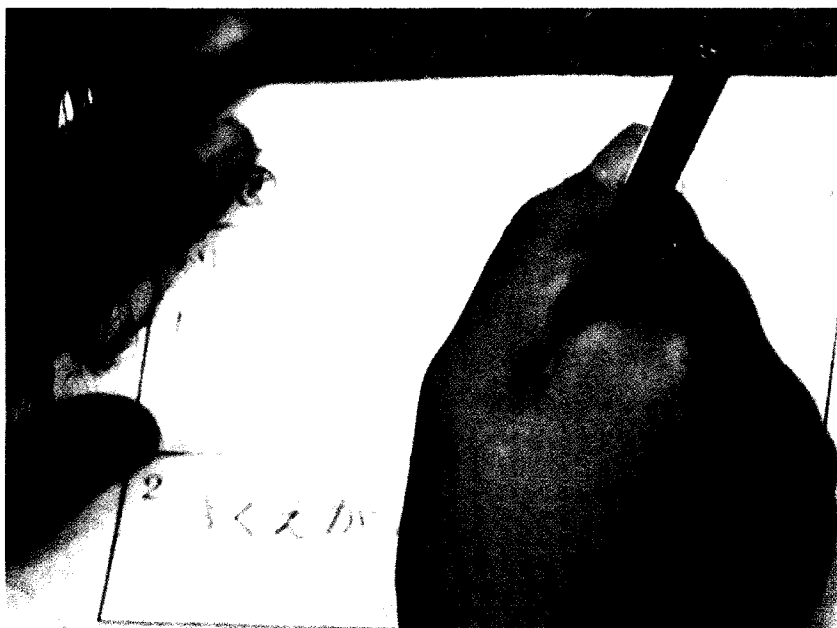
いずれにしても、このサポートの有無は、担任にとっては大きなことであり、今後の大きな課題になってくると思われる。また、前述したように、学級担任や不登校・保健室登校児童への関わり点では、養護教諭の負担も見逃すことはできない。

よって、将来的には、少数加配のような特別な分掌が学校に配置されると思われる。このことに関連して、「協力者会議」はその報告の中で、「コーディネーター的な不登校対応担当の役割の明確化」と銘打って、次のように述べている。

「各学校においては、不登校児童生徒に対する適切な対応のために不登校について学校における中心的かつコーディネーター的な役割を果たす教員を明確に位置付けることが必要である。」と述べ、その具体的な仕事内容を「不登校児童生徒の学級担任や養護教諭、生徒指導主事等との連絡調整」・「情報収集」・「学習支援等の指導のための計画作りに関する学級担任との連携」・「個人指導記録簿の管理」・「関係機関との連携協力」等を挙げている。

多少横道にずれた感がするが、要するに、増加の一途をたどる「不登校」問題は、現在のように、その児童を担当する担任だけに任せるのではなく、学校全体で対応するという態勢になりつつあるといえる。これは社会の要請といえるであろう。

ではここで、市内の小学校の「不登校児童への対応」と、「教員の意識」はどのようになっているのだろうか。



設問3-2. 「ア. 特にしている」と答えた方におたずねします。それはなぜですか。

特に必要な感じないから 2
必要は感じるが、準備する時間がないから 5
その子に対応（個人指導）する職員がいないから 16
その他（ 6

○「特にしている」の理由についての回答は、「その子に対応する（個人指導）する教諭がいないから」が、その主な理由のようである。つまり、学級担任は自分の学級の授業があり、その子につきっきりで対応することは、今の学校現場では、人手不足で不可能だということであろう。

設問3-3. 「イ. している」と答えた方におたずねします。それは、どんな支援ですか。

その子の能力や進度に合わせた手作りのプリント 14
その子の能力や進度に合わせた（低学年の）市販のドリル類 6
現在、授業で使用しているドリル・プリント類 20
自由に、その子のやりたがる学習活動（作業も含む） 17
いろいろな組み合わせ 25
その他（ 3

○何らかの形で個人指導している学校の具体的な内容は、やはり現在教室で使用しているドリルやプリント類が多く、無理強いすることなく、その子に気を使いながら「その子のやりたい学習」や「いろいろと組み合わせて」取り組ませるといったのが現状のようである。

設問3-4. そのとき、主にどなたが、その子の指導（世話）をしていますか。

養護教諭 38
空き時間の教諭 10
加配・図書館司書 5
教務 7
管理者（校長・教頭・教務） 17
その他（ 10

○その子の世話をしている教諭は、最も多いのが養護教諭で、学習についても現在学習している教科書を中心に指導するというよりも、設問3-3の回答にもあったように、実際には、その子の気分次第であり、内容も、その子のやりたいものを中心に・・・である。よって、必然的に学習は当然遅れてくるであろう。

学校によっては、管理者（校長・教頭）がそれを担っているところも少なくないようである。

宜野湾市内の小学校教諭へのアンケート（集計及び考察）

このアンケートは、宜野湾市内小学校へ通う学校不適応（不登校・別室登校）児童への各小学校の「教育相談の組織及びその子への関わり方」やその児童を担当する「学級担任の悩み等」を調査し、その児童を取り巻く学校職員・担任・児童・保護者のより適切な関わり方を模索する資料になるものです。

実施期間 7月14日（月）～7月18日（金）
回収日 7月22日

上記の趣旨で、宜野湾市内の小学校教諭、約300名対象にアンケートを実施したところ、110名の先生方からの回答があった。回収率は、37%である。

「不適応児童への関わり」についてのアンケート

設問1・・・省略

設問2. あなたの学校では、不適応児童（不登校・保健室登校）への対応は、どのような組織体制で行っていますか。（複数回答可）

(順位)

ほとんどが学級担任で 22
学級担任及び学年で 48 (3)
学級担任及び教育相談部で 57 (2)
学級担任及び生徒指導部で 67 (1)
特別な組織を設け対応 8
その他 12

不適応児童への対応の多くは、「学級担任及び生徒指導部」が最も多く、次に「学級担任及び教育相談部」・「学級担任及び学年」・「学級担任」の順になっている。

設問3-1. あなたの学校では、不適応児童（不登校児童や保健室登校児童）への何か特別な支援（特別カリキュラム・個人指導 等）をしていますか。

ア. している 59
イ. 特にしていない 28

「特にしていない」が、28名（32%）というのはいくつか多い感じがするが、現実には、登校させることだけでも精一杯で、その子への学習の支援や個人指導・特別なカリキュラムを組むことまでは手が回らないというのが実態であろう。

「している」という59名の回答も、学校サイトで、組織的・計画的に取り組んでいるところはおそらく、支援の具体的内容及び実際の関わりは、学級担任や養護教諭に一任されているのではないかと

教師が望む研修のトップは、つまり「不適応児童の未然防止のための学級経営」、「早期発見のためのマニュアル」、「段階ごとの対応のあり方」、「保護者・同僚・関係機関との連携のあり方」など、「不適応児童への対応のあり方」であり、マニュアル的な対応のあり方や方法を学びたいのではないだろうか。

設問6. あなたの学校の校務分掌の中の「教育相談部」の組織を教えてください。

分らない	1 1
特別な「教育相談部」という組織はない	4
「教育相談部」という独立した組織がある	4 1
「教育相談部」は「生徒指導部」を兼ねている	4 5
その他 ()	2

どの学校においても、学校の校務分掌のなかに「教育相談部」があり、その多く「生徒指導部」と兼ねているようである。

意外なのは、「分らない」「教育相談部という組織はない」という回答である。意識や関心がないのであろうか。

設問7. あなたの学校の「教育相談部」のメンバーを教えてください。

分らない	1 6
学年から一人	6 2
+ (養護教諭・生徒指導主任・教育相談主任・管理者)	
低・中・高から一人	1 0
+ (養護教諭・生徒指導主任・教育相談主任・管理者)	
低・高から一人	5
+ (養護教諭・生徒指導主任・教育相談主任・管理者)	
その他 ()	8

上記のような回答ではあったが、調べてみると、イのメンバーで教育相談部を組織している学校は、市内では6校で、ウが1校、エが1校であった。

分らないも含めて、教育相談部のメンバー構成を知らない、あるいは曖昧にしか把握していない教諭が結構いるようである。

設問8-1. あなたの学校には、特設の「教育相談の時間」が設定されていますか。

特に設定されていない	5 5
設定されている	4 7

実際には、同じ学校のことなのに、異なる回答があった。このことから、先生方の意識の中に、「教育相談の日」や「教育相談週間」の意識が低いか、あるいは設定されたその日が、機能していない現状にあるのではないかとと思われる。

設問4. 学級担任が不適応児童と関わっていくとき、特に大切なことは何だと思いますか。(三つ選んでください)

愛情 (情熱)	5 2
学級経営 (学級の人間関係作り) 能力 (技術)	5 8
児童理解 (洞察) 能力	7 3
カウンセリングマインド的態度	3 5
同僚との連携	2 7
保護者との連携	6 8
スクールカウンセラーとの連携	1 1
専門機関との連携2 1	
その他 ()	6

上記した事項はすべて、教師が子どもと関わっていくときに、欠かせない大切なことだと思うが、あえて、この中から三つだけを選んでもらった。おそらく先生方はかなり迷ったと思われる。結果は、「児童理解」がトップで、次に「保護者との連携」、次に「学級経営能力」、「愛情」の順であった。「愛情」という回答が多いのではないかと予想していたが、「児童理解」がトップという結果は、経験からの率直な回答だと思われる。

2 番目の「保護者との連携」も経験から出た切実な回答だと思われる。何といっても、保護者の協力なしでは、子どもを養えることはできないと思うから。

3 番目の「学級経営能力」は、正直言って意外な気がする。個人的な「不登校問題」が、自分の学級経営に結びつくと考えられる教師は少ないだろうと思っただけからである。言い換えれば、多くの先生方が、「不登校問題」を、単に「個人的な問題」、あるいは「家庭の問題」と考えず、自分の学級経営＝人間関係作りに大きく関係しているという認識に立っていると考えるのではないだろうか。

設問5. これからの教師には、「教育相談上」のどんな研修が必要だと感じますか。(三つ選んでください)

「学級の人間関係作り」について	3 9
「児童理解」について	3 9
「カウンセリングマインド」について	2 9
「不適応児童対応のノウハウ」について	5 0
「校内における連携のあり方」について	1 9
「保護者との連携のあり方」について	4 5
「専門機関 (適応教室「若葉」等) との連携」について	2 5
「教育相談一般」について	1 8
「問題行動 (いじめ・窃盗等) 児童への対応」について	3 7
その他 ()	

これからの教師にとって必要だと思う研修は、「不適応児童対応のノウハウ」、「保護者との連携」、「学級の人間関係作り」、「児童理解」、「問題行動 (いじめ・窃盗等) 児童への対応について」の順であった。

設問4の「不適応児童との対応で特に大切なこと」の回答と合わせて見てみると「児童理解」「保護者との連携」「学級経営」が同じように上位にきているのは、自然で当然のような感じがする。

担任人個人でできる範囲の対応をし、次に、養護教諭・学年・教育相談部との連携を取り、最後に、管理者及び保護者との相談の末、市内の「不応教室 若葉」との連携となったのではないかなと思われ。

次に多いのが、学年の同僚との連携による対応である。学年会等で、情報交換・対応・悩み等を相談していると思われる。

設問 10. 不応児童を担任しているとき、困ったり、迷ったり、悩んだりしたことは、どんなことでしたか。(複数回答可)

特に困らなかった	5
不応児童への対応の仕方に	4 4
不応児童以外の学級の子どもたちへの対応の仕方に	2 4
校内における連携や相談相手がいなくて	5
専門機関(若葉などの適応教室・教育相談等)との連携の仕方に	4 1
指導の時間が無くて	1 7
その他()	4

「不応児童」を担任していて、先生方が悩んだり、困っているのは、何と云っても「不応児童」への対応の仕方全般のようである。

そして、専門機関「不応教室 若葉 等」との連携の仕方もよく分らず、困っているようである。裏を返せば、先生方は、悩み・迷い・困ったとき、より専門の先生方のアドバイス等を求めているのではないだろうか。市の適応教室や相談員との連携のとおり方が課題であると言えそうである。

そして、見逃せないのが、不応児童の対応と同時に、その子の所属する学級の他の子どもたちへの対応も、どうしていいのかわかっているようである。

設問 11. 不応児童と関わったとき、どのような方法で、登校刺激(登校を促す)を与えましたか。(複数回答可)

特に何もしなかった	0
電話で	5 2
手紙等	2 2
家庭訪問等で	5 0
級友にお願ひした	4 1
養護教諭にお願ひした	1 7
管理者にお願ひした	1 4
その他()	4

○「登校刺激」は、やはり電話が最も多く、次に、「家庭訪問」である。「級友にお願ひした」が、3 番目に多いのは、友人の方の大きさを先生方が知っているということであろう。

設問 12-1. 担任していたとき、不応児童のことについて、相談した人がいますか。

いない	4
いる	5 8

設問 8-2. 「イ. 設定されている」と答えた方へおたずねします。それは、どの時間に設定されているのですか。

毎日位置づけられている	6
週に一度、通時程の中に位置づけられている	1 6
月に一度、「教育相談週間」として位置づけられている	1 5
学期に一度、「教育相談週間」として位置づけられている	0
必要に応じて、学級担任に任せられている	7
その他()	1 1

この回答も学校によって回答が異なっていないはずだが、実際には、まちまちの学校もあった。再度、確認してみたいと思う。

学級担任の先生方へおたずねします。

設問 9-1. あなたはこれまでに、不応児童を担任したことがありますか。

イ. ない	2 7
ア. ある	6 4

回答を寄せてくれた 85 名の担任の先生方のうち、6 4 名、7 5 % の先生方が不応児童を担任した経験があると答えている。

仮に、回答を寄せてくれなかった先生方の中にも、不応児童の担任経験者がいるとすると、おそらく直野市内の全担任の 8 0 % の先生方が、「不応児童」を担任した経験があるか、もしくは、現在抱えているのかもしれない。

「ア. ある」と答えた方へお尋ねします。

設問 9-2. 不応児童を担任したとき、その対応はどうなさいましたか。

(複数回答可)	
特別な対応はしなかった	1
ほとんど一人で対応した	1 2
養護教諭と連携して対応した	3 8
学年と連携して対応した	2 9
校内の組織(教育相談部や生徒指導部)と連携して対応した	2 2
特別な委員会(例不応児童支援委員会等)を設置して対応した	1
校外の専門機関(例 適応指導教室「若葉」・青少年相談室 等)と連携して対応した	3 0
その他()	4

最も多いのが、養護教諭の先生との連携による対応である。このことから、不応児童の対応は、養護教諭なしでは考えられないし、いかに養護教諭の役割が大きいか分かる。逆に言えば、養護教諭の大きな負担(本務以外?)になっているともいえるのではないかな。

次に多いのが、専門機関(おそらく市内の適応教室「若葉」との連携)による対応である。おそらく、

○多くの先生方が、一人で悩まず、誰かに相談していることが分かる。

「イ. いる」と答えた方にお尋ねします。

設問1.2-2. 不慮児童を担任していたとき、その子の対応について、よく相談にのってくれた方はどなたでしたか。(複数回答可)

ア, 養護教諭	39
イ, 教育相談部の同僚	11
ウ, 生徒指導部の同僚	11
エ, 同学年の同僚	43
オ, 同僚の同僚(友人)	15
カ, 上司(校長・教頭・教務)	27
キ, スクールカウンセラー	11
ク, 他校の友人	9
ケ, 専門機関(通心教室「若葉」・医者 等)	15
コ, 家族	5
サ, その他()	0

○やはり相談相手の一番は、毎日顔を合わせることのできる同学年の先生である。そして次に多いのが、先ほどの回答にもあるように、養護教諭である。3番目に多いのが、管理者、特に校長先生への相談である。

設問1.3-1. 関わりを持ったその不慮児童は、無事に回復(再登校)できましたか。

ア. できなかった	21
イ. できた	37

○64名の先生方が、不慮児童を担任し、そのうちの37名が無事に回復させることができ、21名の先生方が、残念ながら回復できなかったようである。

以上が、アンケートの結果と考察であるが、学校によって若干、先生方の意識においても、体制においても差異があるのが分かる。

我々は、もともと「教育相談」の意義や組織や機能について、職員間で十分に議論し、共通認識を踏まえて、「子どもたちへのサポート」を、「保護者へのサポート」を、「担任教師へのサポート」を確立していかねばならないと考える。そのことが本来の意味での「効果的な対応」といえるであろう。学校における十分な対応を確立した上で、外部の「専門機関」と連携していくことを目指さなければならぬと考える。

VIII 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

- (1) 「真の児童理解」について深く研究でき、自分なりの理論を構築することができた。
- (2) 「構成的グループエンカウンター」が、学級集団の望ましい人間関係を構築するのに有効な一手法であることが明らかにできた。
- (3) 学級内の個々の状態や人間関係を調査するのに、Q-Uが有効であることが分かった。
- (4) 「校内サポートチーム作り」の理論と方法についての実践化への見通しがもてた。
- (5) 市内の小学校における「不登校児童」への取組みの実態と教師の意識について明らかにできた。

2. 今後の課題

- (1) 不登校児童への対応について研究した成果を学校に持ち帰り、実践していきたい。
- (2) 「教育相談」の検証授業にもかかわらず、自分の学級の子どもたちの実態の把握及び児童理解については、時間の都合上十分にできなかったもので、今後取り組んでいきたい。
- (3) 学校を離れての研究という制限があり、「校内サポートチーム作り」については、検証ができなかったもので、学校に戻ってから実践していきたい。
- (4) 「グループエンカウンター」のエクササイズについての研究を今後深めていきたい。

3. 終わりに

8年ぶりに学級担任をし、不登校児童と出会い、正直言って、この歳になって初めて自分の教師としての力のなさに気付くと同時に、あらためて「教育」の難しさを思い知らされました。そして、思えば、それが、当研究所入所への動機でもありました。

目の前に居る自分の学級の子どもに、何もしてあげることのできないことほど、教師にとって、惨めで、苦しいものはないと思います。半年間、この研究所で学んだことを、学校現場で生かしていきたいと決意しているところです。

今回、この研究の機会を与えてくださった與那城末子校長並びに宜野湾市教育委員会様、また、節目節目で、励ましの言葉をいただきました当研究所の宮城勇孝所長に心から御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

また、お忙しい中、指導助言者を快く引き受けてくださいました西原洋子先生と、一緒に徹夜までして指導してくださいました新垣英司先生には、言葉では言い表せないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

さらに、縁あって、ともに研究の日々を過ごすこととなった伊禮聰先生、時には議論をして語り合った島袋伸先生、素敵な笑顔と慰労の言葉をいただいた研究所職員の皆さん、本当にありがとうございました。皆さんのご活躍を心より祈っております。本当にありがとうございました。